

岐阜県感染症発生動向調査（2018年第44週～第48週分、11月分）コメント

平成30年12月19日

月番：馬場 尚志

<全数把握対象疾患>

- 一類感染症の報告はない。
- 二類感染症
結核は、前年と比較し、発症者、潜在性結核感染症とも報告数の減少がみられる。この中で、80歳以上の高齢者が発症者の53.1%を占め、より割合が増加している。
- 三類感染症
腸管出血性大腸菌感染症が6例報告された（うち4例が血清型O26）。
- 四類感染症
つつが虫病が毎週1例以上（計7例）報告された。レジオネラ症が4例報告された。
- 五類感染症
百日咳が14例と先月と同様に報告が多かった。このうち10歳未満は1例のみで、年代別報告数では40～49歳が5例と最も多かった。
侵襲性肺炎球菌感染症は小児2例、成人5例（うち2例が90歳以上）の計7例報告された。このうち、ワクチン接種歴が明らかであるのは小児1例のみであった。
梅毒は6例とコンスタントに報告されており、ほぼ前年並みの報告数である。
そのほか、アメーバ赤痢が4例、急性弛緩性麻痺（急性灰白髄炎を除く）が3例報告された。注目される風しんの報告は1例であった。麻しんの報告はなかった。

<定点把握対象疾患>

- インフルエンザは、11月全体でみるとまだ報告が少ないものの、岐阜圏域では第48週に定点当たり患者数が1.8と流行入りの基準である1を超えた。
- A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、感染性胃腸炎は、前月・前年と比較し増加している。
- 伝染性紅斑は、前月の約1.6倍、前年同期の23倍と非常に多く報告されている。
- 流行性角結膜炎は、前月よりは減少しているが、前年同期の約2倍の報告数である。

- ・ 結核では、患者数は減少しているものの、発症者に占める80歳以上の高齢者の割合が増加している。引き続き高齢者施設や医療施設への注意喚起が必要である。
- ・ つつが虫病は、例年11月～12月にピークがみられるが、前年同期までの累計報告数と比較し倍増しており、12月および来年以降の動向に注目が必要である。
- ・ 百日咳は、これまで県内では報告の半数以上を小児が占めていたが、今回は成人例が多く報告された。今後の動向および報告医療機関の変化などに注目が必要である。
- ・ 伝染性紅斑は、前年と比較し非常に多く報告されている。また、流行性角結膜炎は、県内の定点当たりの報告数は前月より減少したが、日本全体では高い水準で推移している。いずれについても県民および医療者への注意喚起・情報提供が必要である。
- ・ インフルエンザは、岐阜県全体としても第49週に患者数が流行入りの基準を超えた。本格的な流行シーズンに備え、県民および医療者への注意喚起が必要である。